



愛川ふれあいの村 今月の風景

2024年8月 自然のたより

猛暑日が続く8月。虫たちも暑いと動きたくないのか、なかなか見ることができません。ただ、暦上は秋になってきているため、村内には少しずつですがトンボが飛んでいます。近年の傾向として、日中は蒸し暑く夕方になると雷と雨がやってきます。この夏に合宿を行っている利用団体からすると少し憂鬱な天気でもありますが、自然の原理を勉強する良い機会にもなります。観天望気には良い季節かもしれませんね。(大瀧)



ミヤマアカネ



オオシオカラトンボ



シオカラトンボ



シオカラトンボ交尾



シオカラトンボ産卵



コシアキトンボ



マユタテアカネ



スミナガシとスズメバチ



ルリタテハ



サトキマダラヒカゲ



ミンミンゼミ



オオスカシバ



ツマグロヒョウモン



仲良しキジバト



オオルリ若鳥

トピックス ★昆虫の色★

暑くなり、セミやカブトムシなど夏の昆虫たちが元気に活動している中、次の季節「秋」に向けてバッタやカマキリなどがすくすくと成長しています。

みなさんはバッタやカマキリの色を聞かれたら何色を思い浮かべますか？種類にもよると思いますが、みどり色を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。実際、みどり色の方が多く見かけますが、茶色のカマキリやバッタなども見かけます。同じ種類でも個体によって色が違うことがあります。オオカマキリもみどりだけでなく茶色もいますし、コカマキリは茶色が基本ですがまれにみどり色のものもいます。これは遺伝的な要因が強いようです。一方バッタは周辺環境により色が変化するようです。周りに仲間が少なくみどりの草が多い場所ではみどりになり、天敵に食べられないようにします。反対に沢山の仲間がいる場所では隠れなくても天敵に食べられる確率は低くなるので茶色になるそうです。たくさんいると、隠れることをやめてしまうようですね。バッタは突然変異でピンク色の子が生まれてくる場合がありますが、その確率は1%とされています。

色の意味や違い、どうやってその色になっているのかなど、「色」に注目してみると様々な発見があるかもしれません。(川原)



生き物 ★北へ向かうクマゼミ★

日の出前のように東の空が薄明るくなってくる頃、遠くでカナカナカナとヒグラシの音が聞こえて来ます。その声に答えるようにあちらこちらでヒグラシが鳴き始めます。大好きな夏の風物詩です。しかし、それもつかの間、ヒグラシの声を打ち破るようなシャワシャワの合唱が始まり、一瞬にして私の楽しみは打ち消されます。かつては西日本にしかないはずのクマゼミが箱根を越えついに神奈川へと生息範囲を広げてきました。今では、北関東でも目撃情報が報告されています。クマゼミは日本で最も大きいセミです。ヒグラシだけでなくミンミンゼミやツクツクボウシなど、もともといた種類の住処がクマゼミに奪われないか心配になります。白河の関を越え、東北地方へ到達するのも時間の問題です。(高梨)



旬 ★鮎★

愛川町の豊かな生態系に欠かせない中津川では、古くから鮎漁がとても盛んに行われてきました。鮎が採れる川「あゆかわ」が由来となって「愛川町」という名前がついたほど。「清流の女王」と呼ばれる通り、水がきれいな象徴にもなっています。天然鮎は、1年物。河口付近で冬を越し、春になると藻を食べながら川を遡上していきます。成長し、上流にたどり着く今こそ香り高く脂がしっかりとった成魚を食べることができるといえるチャンスです。漁獲量を確保するために、中津川でも、人工養殖ものや河口付近から上流への移動放流などを行っています。子どもの魚離れなんて言葉も聞く今日この頃ですが、ぜひ旬の鮎を塩焼きで！食べてみてください。(佐々木)



来月の見どころ

トンボたちの生活

「夏日」「真夏日」の言葉が定着したと思っていると今年は三十五度以上の「猛暑日」が連日続くようになってきた。人間にとつてこの暑さは耐えがたい日々である。「気候変動」と表すと自然現象と思ってしまうが、実際は人間の生産活動の影響が大きい。木々の作つた日陰道を歩くとも風があり涼しい。自然の力は偉大です。

ふれあいの村のトンボたちの生活環境は、防火水槽と小さな水場、芝生と草原の広場ですが約二十種類います。トンボは稲につく害虫を食べてくれる益虫です。幼虫時代は水の中で過ごしボウフラも食べてくれます。池を樂しげに飛ぶネキトンボ、昔はいたかもしれないチョウトンボなどです。九月の観察会は、「トンボの世界」です。

最近、トンボが激減していると言われてます。原因は開発行為に伴う池や沼の減少、水質の汚濁、地球温暖化や大気汚染。今こそ人も生き物も大切にすることを基本とすすべての生き物が安らぐ世界になってほしい。(吉田)

